

【研究主題】

社会の在り方や自らの生き方を追求する子どもの育成

～社会的な見方・考え方を働かせ、「問い」を紡ぐ社会科学習を通して～

〈第1年次〉

1 研究のねらい

現在、気候変動や食糧難などの社会活動に多大な影響を及ぼす問題が、世界規模で深刻化している。グローバル化が進み、それらの問題は複雑に絡み合い、ますます先行き不透明な時代が到来する。そのような予測困難な社会を生きる子どもたちには、「生きて働く力」「未知の状況に対応する力」「学んだことを人生や社会に生かす力」といった資質・能力の育成が欠かせない。社会科学習には、そのような中で、多様な解釈・多彩な解のある社会的事象との出会いを通して、子どもが社会の在り方やその中でどう生きるかを追求する態度を養っていく上で大きな役割がある。

また、これまで大切にしてきた社会的事象の特色や相互の関連、意味を多面的・多角的に考察（確かな社会認識を得ること）したり、構想（社会認識を土台として未来の社会や自分を描くこと）したりする社会科学習においては、子どもの主体性が発揮される学びの充実がより一層求められる。そこで鍵となるのは、社会的な見方・考え方を働かせる「問い」の創出である。「問い」は、自分ごととして追求活動を行う出発点であると同時に、社会的事象のより深い考察や構想へ導くものだからである。子ども自身が見いだした「問い」に基づく問題解決的な学習を充実させることで、明確な答えがない課題に対しても、よりよい解決の在り方を他者と協働して問い続け、たくましく未来社会を生き抜こうとする意思を持った子どもの育成を目指したい。

これまで本県が積み上げてきた研究・実践の成果を生かし、子どもが社会的な見方・考え方を働かせ、「問い」を紡ぎながら学び続けることができるような単元の構想について研究を深めていく。子どもが様々な社会的事象に対して切実な「問い」を持ち、他者と「問い」を共有しながら課題を粘り強く追求し、思考を広げ深めていくことができるような学びの先に、期待される資質・能力を身に付けた子どもが育成されると考え、本研究主題を設定した。

〈本研究における「問い」と「問い」を紡ぐ社会科学習について〉

「問い」とは

子どもに投げ掛ける問い（発問や振り返りの視点）や子どもが心に抱く問い（疑問や予想、意思）、そして子どもと共につくる問い（学習問題）。

「問い」を紡ぐ社会科学習とは

社会的事象との出会いを通して様々な「問い」が生まれ、その「問い」を他者と共有して互いの認識のずれに気付き、大きな「問い」（学習問題）につなげる。そして、追求の過程で多様な他者の意見を基に新たな「問い」を見だし、その「問い」をさらに追求する。このように「問い」を紡ぎながら自らの思考を広げたり深めたりする学習。

2 研究の視点

(1) 教材開発・単元構成の工夫

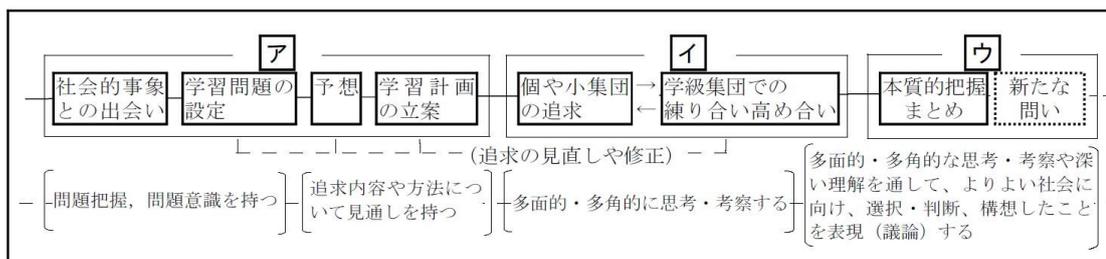
- 教材（学習指導要領に示されている内容と子どもを結び付けるための材料）を客観的側面（数値等のデータや地図、年表等）・実感的側面（写真や見学、模擬体験等）・共感的側面（ゲストティーチャー〈以下GT〉との関わり等）から見直し、切実な「問い」や多様な「問い」が生まれる教材かどうか吟味・検討する。
- 子どもが社会的事象を身近に感じ、社会の在り方や自らの生き方を追求することができるように、次のような視点を踏まえて教材開発を行う。
 - ・工夫や努力、協力など人間の知恵から学ぶことができる人の姿や地域素材の教材化
 - ・情報化や環境悪化、防災・安全など、社会の変化に伴って提起される今日的課題や簡単に答えが出ないような問題の教材化

- 子どもの問題意識のつながりや他教科との関連、小・中の系統性を踏まえて単元を構成する。その際、子どもが問題解決への見通しを持ち、社会的な見方・考え方を働かせながら、社会の在り方や自らの生き方を追求することができるよう、「問い」に焦点を当てて問題解決的な学習過程を構成する。

(2) 学習指導方法の工夫・改善

- 社会の在り方や自らの生き方を追求しようとする資質・能力は、子どもが「問い」を持ち、主体性を発揮しながら調べたり考えたりして適切に表現する問題解決的な学習過程において育成される。そこで、下のように単元を構成して学習を展開する。

〈問題解決的な学習過程〉



その際、それぞれの場面の持つ意義を考え、子どもが社会的な見方・考え方を働かせ、「問い」を紡いで思考を広げ深めていくことができるよう、教師のコーディネートの在り方に重点を当てて学習指導方法を工夫・改善する。

- **ア**の場面では、問題意識を大切にして、社会的な事象との出会わせ方を工夫し、単元のねらいに迫ることができる価値ある学習問題を設定する。また、子どもの予想を基に学習計画を立て、個や小集団での追求内容や方法の見通しを持たせる。
- **イ**の場面では、「学習問題の解決に向かっているか」という視点から、追求の内容や方法を見直し、協働的に追求させる。また、「問い」を工夫することで、子どもが追求の成果を根拠にして考えを練り合い高め合う話合いの質を高め、学習問題について多面的・多角的に思考・考察させる。
- **ウ**の場面では、予想したことや多面的・多角的に思考・考察して理解したことを想起させ、社会的な事象について本質的把握をさせる。また、社会に見られる課題を把握し、その解決に向かう社会の在り方や自分たちの関わり方を選択・判断し、構想したことを表現（議論）することで、さらに社会について理解を深めたり、社会への関心を高めたりさせる。

(3) 評価の工夫

- 評価場面を精選し、単元の目標や学習のねらいに即した具体的な評価規準を作成し、効果的・効率的な評価を行う。
- 社会科日記やワークシートの内容、活用の仕方を工夫し、子ども自身の学び方や社会的な事象に対する思考の広がりや深まりを見取って評価に生かすことで、学び続ける子どもを育成する。

3 留意事項

- 社会的な事象の意味や意義を解釈する、社会的な事象の特色や事象相互の関連を説明する、持続可能な社会の形成等の視点から自分の考えを表現（議論）するなど、言語活動を充実させる。
- 問題解決的な学習過程のそれぞれの場面で ICT 端末や思考ツールを効果的に活用し、情報を収集し、読み取り、まとめる活動やその成果を友達と共有する活動、学びを振り返る活動などを充実させる。
- 「教師と共に教材開発を行う」「子どもに『問い』を持たせる」「子どもと共に追求する」「子どもの追求を価値づける」「子どもを実社会とつなげる」等、GT を効果的に活用する。